

**P-89** 肺癌における癌性髄膜炎の検討

須藤 淳子・本村 泰雄・栗本 太嗣・駒形 浩史  
酒井 洋・米田 修一・卯木 次郎  
埼玉県立がんセンター

<目的>肺癌症例における癌性髄膜炎の臨床的検討<方法>当院における肺癌患者で2001.1.1~2005.3.31までの期間に髄液細胞診あるいは画像にて癌性髄膜炎と診断したものを対象に、臨床的特徴、臨床経過、画像所見、治療、予後について検討した。<結果>2001年1月から2005年3月までに癌性髄膜炎と診断された肺癌患者は総数37例であった。男性26例、女性11例で、組織型は腺癌26例、小細胞癌6例、扁平上皮癌3例、大細胞癌1例、他1例であった。髄液細胞診陽性例は28例で、陰性例は造影MRIにより診断した。髄膜炎による症状出現日から髄膜炎診断日までmedian18日、髄膜炎診断日から死亡日までmedian97.5日であった。髄膜炎の治療としては、PSや原発巣の制御状況に応じて全脳・全脊髄照射、全脳照射、化学療法、緩和治療が行われた。髄膜炎発症後の化学療法としてはGefitinib投与が多く、髄膜炎が著明に改善した例も認められた。<結論>当院における肺癌に合併した癌性髄膜炎は腺癌が多く、髄膜炎診断日から死亡日まで約3ヶ月だった。診断に関しては髄液細胞診陰性でも画像上髄膜炎と診断することができ、造影MRIは診断に有用であると思われた。治療に関しては、全脳・全脊髄照射ができた症例はできなかった症例と比べ、予後が延長する傾向を認めしたが、今回はretrospectiveな検討であり、照射の意義は明らかにできなかった。また、腺癌患者の髄膜炎に対し、Gefitinibは有効な治療法のひとつとなる可能性が示唆された。

**P-91** 肺癌脳転移に対するガンマナイフ療法の治療成績の検討

吉田 健也・山本 雅史・島 浩一郎・中村 俊信  
浅野 俊明・竹山 佳宏  
名古屋掖済会病院 呼吸器科

【目的】当院での肺癌脳転移症例に対するガンマナイフ療法の成績について検討した。

【対象】2003年12月から2005年4月までに肺癌脳転移に対しガンマナイフ療法を施行した18例を対象とした。

【結果】男性13例、女性5例、平均年齢65.9歳。脳転移診断時のPSは、0/1/2/3/4がそれぞれ1/9/4/4/0例、組織型は腺癌7例、扁平上皮癌4例、大細胞癌2例、非小細胞癌3例、小細胞癌2例、転移の数は平均2.5個であった。6例においては経過中に全脳照射を併用している。放射線壊死は1例に認められた。脳転移診断時に5例においては他部位に遠隔転移を認めた。ガンマナイフ照射部位の再発は2例に、ガンマナイフ照射部位以外の新たな脳転移は10例に認められた。現在までに7例の症例が死亡しているが、脳転移が死因となった症例が2例、脳転移以外が死因となった症例が5例であった。ガンマナイフ施行日からの中央生存期間は、全18症例で8.0ヶ月、全脳照射を併用していない12症例では9.1ヶ月であった。

【結論】ガンマナイフの局所制御率は良好で、生存期間も全脳照射単独の報告と比較して良好であった。

**P-90** 無症候性脳転移を有する非小細胞肺癌に対する化学療法の有効性の検討

平野 聡<sup>1</sup>・竹田雄一郎<sup>1</sup>・泉 信有<sup>1</sup>・小林 信之<sup>1</sup>  
工藤宏一郎<sup>2</sup>

<sup>1</sup>国立国際医療センター 呼吸器科；<sup>2</sup>国立国際医療センター 国際疾病センター

【背景】従来、脳転移に対する化学療法は治療効果が乏しく、放射線療法や手術療法が最善策とされてきた。一方、MRIによる微小脳転移の発見の増加や新規抗腫瘍剤の開発に伴い、脳転移症例に対する化学療法の有効性が期待される。【目的】脳転移を有するIV期非小細胞肺癌に対する化学療法の治療効果を評価する。【方法】1998年4月から2004年12月までに当院で初回化学療法を受け、全身、および脳病変の治療効果判定が可能であった無症候性脳転移を有するIV期非小細胞肺癌症例19例を対象とした。平均年齢63歳(51-82)、男/女=10/9、PS(0/1/2/3)=7/10/1/1、組織型は腺癌16例、扁平上皮癌2例、低分化癌1例であった。脳転移巣については単発6例、多発13例であり、遠隔転移は脳のみが2例、脳以外に骨、肝、肺、副腎にそれぞれ8、2、4、1例であった。【結果】化学療法のレジメンはCisplatin(CDDP)+irinotecan(CPT-11)が12例、Carboplatin(CBDCA)+paclitaxel(PTX)が4例、CDDP+gemcitabine(GEM)が1例、Docetaxel(DOC)+GEMが1例、CDDP+CPT-11からCBDCA+GEMが1例であった。脳病変を除く全身での効果判定ではPR3例、SD11例、PD5例であった。脳病変については消失1例、不変16例、悪化2例であった。治療中に脳転移による症状が出現したものはなかった。最終死因は脳転移によるものが3例でいずれも癌性髄膜炎を伴っていた。その他の死因は癌死が8例で他病死が1例であった。生存期間中央値は11ヶ月であった。【結論】無症候性脳転移症例においては化学療法で脳病変が悪化することは少なく、導入療法として、全身への効果が期待できる化学療法が第一選択となる可能性がある。

**P-92** 当院における肺癌脳転移症例の検討

山口 博之<sup>1</sup>・木下 明敏<sup>1</sup>・川畑 茂<sup>1</sup>・佐々木英祐<sup>1</sup>  
辻 博治<sup>2</sup>・早田 宏<sup>3</sup>・河野 茂<sup>3</sup>

<sup>1</sup>独立行政法人 国立病院機構 長崎医療センター 呼吸器科；<sup>2</sup>独立行政法人 国立病院機構 長崎医療センター 外科；<sup>3</sup>長崎大学第2内科

【背景】進行期肺癌では、化学療法による延命効果もあって、脳転移の併発を多くの症例で認め、脳転移の制御が重要な課題となっている。【目的】脳転移を併発した肺癌症例について背景因子、組織型、治療、予後について検討する。【対象と方法】当院において加療を受けた肺癌脳転移症例のうち、2003年8月から2005年7月の2年間に新規に脳転移を指摘された30例について年齢、性別、組織型、転移病巣数、最大径、治療などの因子をretrospectiveに検討した。【結果】平均年齢69.7歳(45-82歳、中央値68.5歳)、男性22例、女性8例。組織型は腺癌21例、扁平上皮癌3例、腺扁平上皮癌1例、分類不能型1例、小細胞癌4例であった。転移病巣数は1個が15例、2-9個が10例、10個以上が5例であった。腫瘍径は30mm以上が9例(最大40mm)認められた。治療としては延べ数で摘出術5例、ガンマナイフ13例、全脳照射4例(うちガンマナイフ後全脳照射が1例、術後ガンマナイフ1例、術後ガンマナイフ・全脳照射1例を含む)、局所治療無施行が11例であった。抄録時点で9例が死亡確認されていた。さらに症例を追加し、治療内容、予後について詳細に検討を加え報告する予定である。